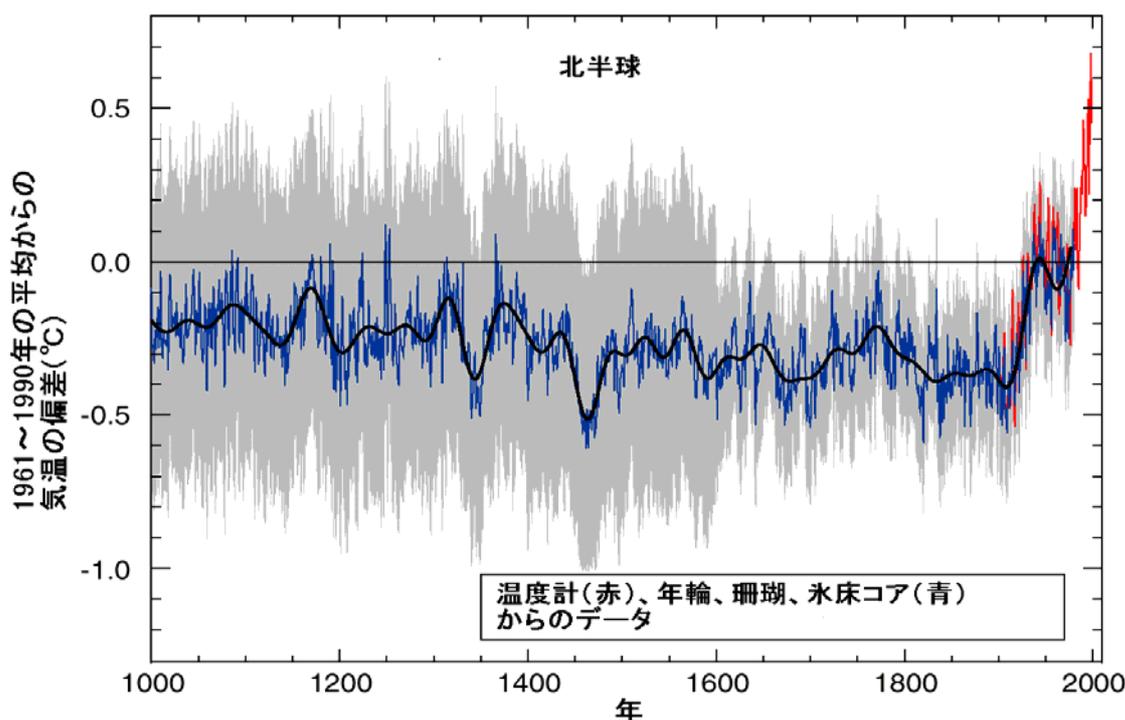


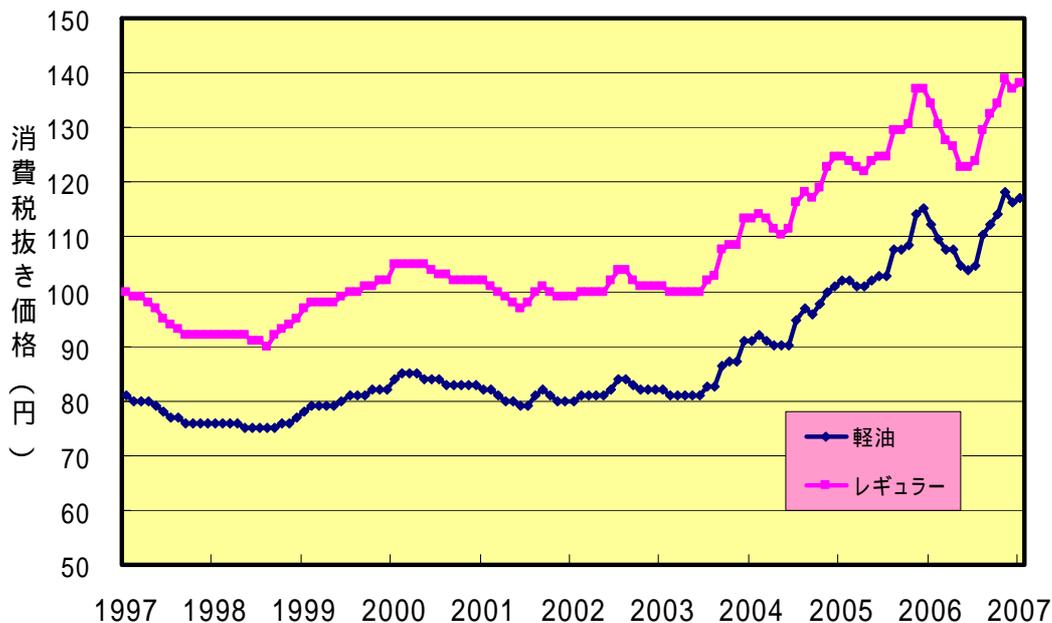
## 1. 概要

つい最近まで、私たちの暮らしは「大量消費型経済」と表現されていたように、新しい商品を大量に消費することがごく当たり前のように行われていたのではないのでしょうか。しかし近年の大量生産、大量消費、大量廃棄型の社会経済活動や生活様式は、環境への負荷を増大させ、自動車排出ガスによる大気汚染や生活排水による水質汚濁などの都市・生活型環境問題、さらには地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨など地球規模の環境問題を引き起こすまでに至っています。このように環境問題が叫ばれるようになった今日では、今までの「大量消費型経済」から、省エネルギー対策の徹底、資源の再利用などにより、できるだけ廃棄物を減少させる「循環型経済」へ移行する必要があることは皆様もよくご存知のとおりです。現在、省エネルギーという観点から、ビル・工場などのエネルギー管理、自動車や電気機器の効率化、自動車のアイドリングストップ、物流の効率化などが対策例として取り上げられています。このような、現行の省エネルギー対策を着実に実施していく

とともに、今後新たに行っていく省エネルギー対策としては、国民生活にとっても企業活動にとっても長期将来にわたり継続可能なものであることが必要であるといえます。したがって、出来る限り効用を変えずにエネルギー効率の改善を図る（エネルギーの無駄を無くす）といった従来からの省エネルギーの基本的な考え方を踏まえながら、できるだけ負担が少ないものが望まれます<sup>1</sup>。また最近の原油価格の高騰といった状況を受け、このような省エネに対する動きは、経済的な側面からもますます盛んになるものと考えられます。

潤滑とは、相對運動する二つの固体の接触面の間に、潤滑剤を存在させて、相互の運動を円滑に行わせることをいいます。金属同士の直接接触を潤滑膜でさえぎり、軸と軸受の摩耗を防止して、機械精度を維持する「摩耗防止作用」及び摩擦を低減し動力損失を少なくする「摩擦低減作用」等が潤滑油の大きな役割ですが、例えばエンジン油を省エネタイプのものに変えること等は、省エネに有効であると期待されます。





最近10年間の自動車用燃料価格動向 (出典\*3)  
 (石油情報センター「給油所石油製品市況調査」データをもとに作成)

詳細については、次ページの「潤滑油の基礎知識」をご覧ください。

における使用済み潤滑油の発生量は 118 万kL / 年と推定されており、燃料としてのリサイクルが中心となっています<sup>5</sup>。しかし「改正リサイクル」法ではリサイクル対策の強化とともに、リデュース対策（廃棄物の発生抑制）及びリユース対策（廃棄物の再利用）が導入されています。潤滑油においては、「長寿命潤滑油」や適切な使用による「潤滑油の延命化」への取り組みが今後盛んになっていくものと考えられます。

ここでは、潤滑油メーカー及びユーザーのさまざまな取り組みについて具体例をあげながら紹介していくこととします。

文 献：

\*1 総合資源エネルギー調査会省エネルギー部会 省エネルギー部会報告書 2001.6

\*2 全国地球温暖化防止活動推進センターホームページ

[http://www.jccca.org/education/datasheet/03/data0304\\_2001.html](http://www.jccca.org/education/datasheet/03/data0304_2001.html)

\*3 石油情報センターホームページ(価格情報)

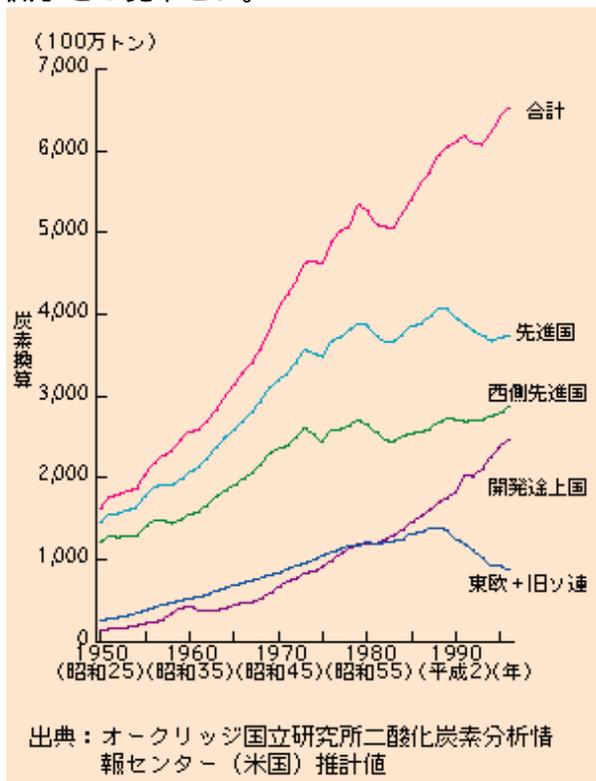
<http://oil-info.ieej.or.jp/price/price.html>

\*4 環境省ホームページ

<http://www.env.go.jp/>

\*5 (社)潤滑油協会 パンフレット

「どうしていますか？ 廃油の分別 2006」



世界のCO<sub>2</sub>排出量推移 (1950~1996) (出典\*4)

また廃棄物・リサイクル問題については最終処分場のひっ迫や資源の枯渇等の制約から、その対策が急がれているところです。現在、国内